

直方ミニバスケットボールクラブだより

奇跡の47.6秒

～みんながつないでくれた2球の意味とその重み～



9月27日（日）に子どもたちを前に直接語ってくれた話が、とても心に響くものだったので、残しておきたくて、「文字にしてきてほしい」とたのんだら、翌28日（土）、成海コーチにとっての最終日に、原稿を残していってくれました。それを紹介します。（前号の、私が聞き取った概容と併せてお読みいただくと、さらに深く理解していただけるとと思います）

直方クラブのみんなへ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
バスケで学んだ3つのこと

俺がバスケットを通して学んだことは、「なかまを大切にすること」「『ごめん』と言える人になること」「でもがんばるの気持ちをもつこと」。大きく言うと、この3つ。

メンバーそれぞれに役割がある

バスケのポジションと同じように、メンバー一人ひとりにそれぞれの役割がある。ガードプレーヤーにセンターをやらせるのには無理がある。センタープレーヤーにガードをやらせるのにも無理がある。誰にでも、できないことはある。でも、それをカバーし合えるのが、チームメイト（なかま）であり、チームなんだと思う。

「なかま」って大切

高校時代、バスケがうまくいかず、何度も辞めようと思った。それをなかまに相談すると、「おまえが辞めるなら、俺も辞める」と言ってくれた。本当にうれしかった。こんな俺でも必要としてくれる人がいる。それを経験して、「なかま」って大切だになって、心の底から思えた。

「ごめんね」が言える人に

その一方で、言い合いも多かった。でも、自然とお互いが「ごめん」と言えるようになっていた。すると、「言い合い」が「話し合い」に変わっていき、その話し合いのなかでお互いの考え方やとらえ方が分かるようになった。気づけば、自分の見方からだけでなく、相手や周りの人たちの見方からも考えられるようになっていた。本当の「なかま」とは、そういう関係の人だと思う。直方クラブのみんなは、「ごめん」と素直に言える「なかま」であってほしい。

「でもがんばる」と思える人に

そして、「でもがんばる」と思える人であってほしい。「シュートが入らなかった。でもがんばる」「ミスしてしまった。でもがんばる」。さらに俺が思っているのは、「シュートが入った。でもがんばる」「ドリブルがうまくいった。でもがんばる」ということ。今の自分に満足せず、上をめざしてほしい。

奇跡の47.6秒

この3つがあったからこそできたことがある。それは、高校の引退試合の5日前に、おれがケガ（骨折）をしてしまったときの話。

そのタイミングでのケガは、絶望的だった。しかし、なかまの助けと「でもがんばる」の気持ちで、試合残り時間47.6秒という短い時間だったが、コートに立つことができた。うったシュートは2本。2本とも入らなかったが、みんなが俺につないでくれた2球を忘れることはない。ドラマみたいな話だが現実にあったこと。

「なかまを大切にすること」「『ごめん』と言える人になること」「でもがんばるの気持ちをもつこと」を学び、それを実行することができたから起きた奇跡の47.6秒だったんだと思う。

みんな、ありがとう

みんなにも、こんな経験ができる人になってもらいたい。短い時間だったけど、本当にありがとう。福岡に帰ってきたら、またよろしく。

五郡成海

保護者の方々へ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

高校卒業して就職するまでの半年間という短い期間ではありましたが、とても充実した日々を過ごすことができました。

子どもたちからたくさんのことを学びました。普通の生活では味わうことのできない達成感と、子どもたちが教えたことを吸収しプレーしてくれる嬉しさを、身をもって感じることができました。何のノウハウももたない私が、ここまで子どもたちとふれあい、このような経験ができたのは、保護者の方々のご理解とご支援があったからだと思っています。本当にありがとうございました。子どもたちの健やかなる成長と直方クラブのご健闘を心から願っています。

短い間でしたが本当にありがとうございました。ご縁があれば、またよろしく願い致します。

五郡成海

